

モデル問題例1

短歌について書かれた次の【文章Ⅰ】と【文章Ⅱ】を読んで、後の問い（問1～5）に答えよ。

【文章Ⅰ】

毎朝起きると、顔を洗い、歯を磨き、料理をして、ご飯を食べる。五感のうちでもっとも幼稚だけれどもっとも根源的なのが触覚であると、彫刻家の高村光太郎が言っていたが、あるいはその根源性ゆえに、私たちは私たちの一瞬一瞬が手指や舌などの触覚によって成り立っていることを普段は忘れがちだ。

触覚が本当に生きている歌というのは、視覚や聴覚の歌に比べると思いのほか少ない気がする、^ア「琴線に触れる」「やさしさに触れる」といった言い回しがあるように、「触れる」というのは象徴的、観念的に使われることも多い言葉である。短歌でも、何かに「触れる」という歌はたくさんあるけれど、それがすなわち触覚の生きた歌だとは限らないのだ。

一粒づつぞくりぞくりと歯にあたる泣きながらひとり昼飯を食ふ

河野裕子『歲月』

ひやひやと素足なりけり足うらに唇あるごとく落椿踏む

同『体力』

触覚の歌人としてまず思い浮かぶのが、河野裕子。こうした歌のなんとなまなましいことだろう。一首目、「ぞくりぞくり」が怖いくらいに肉感的である。神経が昂ぶっているときの、異様に研ぎ澄まされた感覚だろう。二首目には、裸の足裏にものが吸いつくようなリアルな感じが喩によって再現されている。全身の皮膚は、世界と自分の境目であり、また繋ぎ目でもある。そのことの面白さを全力で味わうかのような触覚の歌。

モデル問題例1

こんなにも湯呑茶碗はあたたかくしどろもどろに吾はおるなり
花冷えや夕暗がりにかむ涙がほのかに温^ぬしてのひらの上に

山崎方代 『右左口』
島田幸典 『駅程』

何かに触れることは、生きている自分自身を確かめ直すことなのだと思う。手に包み持つ湯呑茶碗や自分の涙の、侘^{わび}しいような温かさがここにはある。

触れることが命の輪郭をなぞり直すこととしたら、それは他者の命についても同じだ。自分で自分をくすぐっても何も感じないように、私たちは自分と異なる他者に触れたときに触覚を意識することが多い。ひとの身体に気軽に触れる機会は現代の日本では減ってきているが、例えば介護、出産、子育てなど家族との時間のなかでは、身体に触れることが多いだろう。また、次のような性愛の歌でも触覚が印象的に詠まれる。

君の髪に十指差しこみ引きよせる ^(イ) 時雨の音の束のごときを

松平盟子 『帆を張る父のやうに』

髪^{かみ}のひとすじずつの柔^{やわ}く冷たい感触を「時雨の音の束」に喩^{たと}えることで、「君」の儂^{はかな}さが切なく立ち上がってくる。触覚を「音」に喩えるというややアクロバティックな比喩でありながら、すつと胸に入ってくる。

1

2

いちじくの冷たさへ指めりこんで、ごめん、はときに拒絶のことば

千種創一『砂丘律』

生きている／生きていた命に触れることは、しばしば怖れや気味の悪さを伴う。それぞれ動詞がリアルに効いていて、日常の破れ目が見えるような怖さがある。

ひとつひとつの何でもない場面が、触覚を経由することでひりひりと印象づけられる。つまるところ、触覚にはやはり体験の一回性の力強さがある気がする。視覚なら今は写真や映像があるし、聴覚ならさまざまな音源があるが、触覚は基本的に「記録」できない。実際の体験と切り離せない。そんなかけがえのない触覚を、言葉によって再現してやろうという挑戦がある歌、そして、さまざまなものに触れながら生きている自分の輪郭を新鮮に確かめ直すような歌が面白いのではないだろうか。

(大森静佳「わたしの輪郭、いのちの感触」による)

【文章Ⅱ】

(ウ) 感嘆おくあたわざる、といった出会いをした聴覚の歌を三つあげよう。

ひたぶるに暗黒を飛ぶ蠅ひとつ障子にあたる音ぞきこゆる

斎藤茂吉『あらたま』

真つ暗闇の部屋のなかを、迷い込んだ蠅がひとつ出口をもとめて飛び巡っている。ときおり障子にぱしつとあたる重い音——この「音」を何と言いいあらわしたらいいかと、もどかしい。

銀蠅などとも言った大きい蠅であろう。「音」には質量がある。ぐしゃりと潰れる生身も感じられる。そんな存在が、暗黒

モデル問題例1

のなか、光をもとめては飛礫つぶてのように盲動し、身をうちあててはまた盲動する。あたかも運命であるかのようにへ受苦するその音。

ニコライ堂この夜揺りかへり鳴る鐘の大ききあり小さきあり大ききあり
北原白秋『黒檜』

初めてこの歌を知ったとき、文字通り感嘆した。教会の鐘の音がまるで耳元で鳴っているようだ。「この夜」は特別の夜、題にあるように降誕祭前夜。「大ききあり小さきあり」の繰り返しだけでは単調に終わるところを「小さきあり大ききあり」と続けて、言葉そのものが鐘の響きとなっている。なんとと言ってもすごいのは「揺りかへり」。実際に作っていると、これが出ない。これがあるから、下の句が生きてくる。

空そらの日に浸しみかも響く青々と海鳴るあはれ青き海鳴る

若山牧水『海の声』

まっ青な空。日は高々とさしのぼる時刻、目をつぶって寝転ぶ。まぶたの裏は日のひかりであかるい。海鳴りが聞こえる。なんと空の日に滲しみ入るように響くものか。青々と海が鳴っている。青い海が鳴るよ。

明るくて気持のよい、うつくしい青の響くような歌。青の色彩と響きとが溶け合っている。「青々と海鳴るあはれ青き海鳴る」の繰り返しが絶妙だ。「青々と——鳴る」だからこそ、海から空へとひろがる青の空間が生まれた。さらに「青き海」と言いかえて単調にせざうたいおさめていく。

(注) 右三首のうち白秋と牧水の歌は、作りが似ている。白秋「揺りかへり鳴る鐘」も牧水「空の日に浸みかも響く」も、三次

モデル問題例1

元空間をもたない。揺れる鐘も、空の日も、読者には視覚的刺激をともなって想起されるけれども、言葉の組み立ては三次元的ではない。歌全体が聴覚と化したようで、響きそのものになって拡がっていくようだ。それは、茂吉の、すべてが「音」に集中する歌と比べればよくわかるだろう。茂吉の歌は、灯を消した暗い部屋という現実の三次元空間を「ひたぶるに暗黒を飛ば」と真つ黒に塗りつぶした。だからこそ耳は「音」に集中して異次元へと誘われる。

みづうみの氷に立てる人の声坂のうへまで響きて聞こゆ

島木赤彦『氷魚』

この歌は、聴覚をもって一首を統合し、三次元空間を見せたところに新鮮さがある。地形と作者との位置関係が明確で、空間が感じられる。冬の澄んだ空間に固く響く声の反射が聞こえてきそうだ。

赤彦たちは、三次元空間の現出を「写生」という語によって探求した。それゆえ歌はどうしても視覚中心になる。聴覚をもって一首を統合しなければならない場合にも、視覚が干渉してきやすい。

大きな風音となれり目のまへに曇り垂れたる冬田のおもて

島木赤彦『太虚集』

「大きな風音となれり」なんて言ったって、少しも風音は聞こえてこない。視覚把握による「目のまへに曇り垂れたる冬田のおもて」はよく見えるが、音に関してはまったく索漠たるものだ。大きな風音になったとただ説明しているだけである。かの島木赤彦にして、こうだったのである。

(阿木津英「『写生』と聴覚」による)

モデル問題例1

問1 傍線部(ア)～(ウ)の本文中における意味として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は①～③。

(ア)

琴線に触れる

①

- ① 落ち着き安堵させること
- ② 失望し落胆させること
- ③ 感動や共鳴を与えること
- ④ 動揺し困惑させること
- ⑤ 怒りを買ってしまうこと

(イ)

② 時雨

① ② ③ ④ ⑤

- ① 春の、特に若芽の出る頃、静かに降る細かい雨
- ② 昼すぎから夕方にかけて、急に曇ってきて激しく降る大粒の雨
- ③ 一しきり強く降ってくる雨
- ④ 秋の末から冬の初め頃に、降ったりやんだりする雨
- ⑤ みぞれに近い、きわめて冷たい雨

(ウ)

感嘆おくあたわざる

③

- ① 感嘆せずにはいられないこと
- ② 感嘆してはられないこと
- ③ 感嘆する余裕がないこと
- ④ 感嘆するか迷ってしまうこと
- ⑤ 感嘆することもありうること

<正答>

問1 (ア)③ (イ)④ (ウ)①

モデル問題例1

問2 【文章Ⅰ】の空欄1、2について、筆者がここに引用した短歌を次の①～⑥のうちから二つ選べ。ただし、解答の順序

は問わない。解答番号は 4・5。

- ① 悲しみの単位として指さす川にはなみずき散りやんでまた散る
服部真理子『町』
- ② ぬめつとるまなこに指をさし入れてゆびが魚をつきやぶるまで
吉岡太郎『ひだりききの機械』
- ③ 触れることは届くことではないのだがてのひらに蛾を移して遊ぶ
大森静佳『てのひらを燃やす』
- ④ 足のゆびはおろかにし見ゆ湯あがりの一人しばらく椅子にゐたれば
河野愛子『夜は流れる』
- ⑤ 遠くまで来てしまひたり挽き肉に指入るとき今も目つむる
朝井さとる『羽音』
- ⑥ 風よりも静かに過ぎてゆくものを指さすやうに歲月といふ
稲葉京子『柵の門』

問3 【文章Ⅰ】で示された「触覚」の説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 6。

- ① 生きているものに触れることの恐怖感や不気味さを克服して、その真の姿を知ること。
- ② 記録する媒体に頼ることなく、たった一度の経験を自ら記憶し続けること。
- ③ 何かに触れるリアルな体験により、自他が一体化した感覚を強く意識すること。
- ④ 視覚や聴覚による認識をこえて、対象の本質に深くせまろうとすること。
- ⑤ 直接触れる実体験を通して、何気ない生活場面や自らの存在を鮮明に捉え直すこと。

問4 【文章Ⅱ】の傍線部(エ)「右三首のうち白秋と牧水の歌は、作りが似ている」とあるが、これらの作品の説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 7。

- ① 知覚した音の響きが視覚に変換され、リフレインを効果的に使うことによって、より実感的に音が表現されている。
- ② 知覚した音の響きそのものが言語化され、リフレインを効果的に使うことによって、音の拡がりや表現されている。
- ③ 知覚した音の響きそのものが言語化され、比喩表現を効果的に用いることによって、読者を異次元空間に誘っている。
- ④ 知覚した音の響きと実景が言葉によって融合し、対句を効果的に用いることによって、立体感ある情景が表現されている。
- ⑤ 知覚した音の響きや視覚に変換され、対句を効果的に用いることによって、音のうねりや拡がりや表現されている。

<正答>

問2 ②—⑤(順序問わず)

問3 ⑤

問4 ②

問5 【文章Ⅰ】と【文章Ⅱ】を踏まえて、「国語総合」の授業で次の短歌を鑑賞することとした。【生徒たちの会話】を読んで、後の(i)～(iii)の問いに答えよ。

死に近き母に添寝のしんしんと遠田のかはづ天に聞ゆる

斎藤茂吉『赤光』

【生徒たちの会話】

生徒A この短歌は母が危篤であるという知らせを聞き、東京から急いで故郷の山形へ戻った作者が、母を看病していた時の歌で、【文章Ⅰ】で取り上げている「触覚」と、【文章Ⅱ】で取り上げている「聴覚」のどちらにも関わる歌ですね。まずは「触覚」の観点でこの短歌を捉えてみるとどのようなことがわかるでしょうか。

生徒B 「触覚」を連想させる言葉は「添寝」ですね。一つの部屋の中で、隣に寝ている死に近い母に触れている作者の実験が表現されていると思います。

生徒C 一方、「聴覚」に着目してこの短歌を鑑賞してみると、遠くの田で鳴く「かはづ」の生にあふれた声が響き合っている状況を表現していると考えられます。【文章Ⅱ】で紹介されている明るくダイナミックな「空の日に」の歌とは対照的な世界が表れています。

生徒A そうですね。しかし、私はこの短歌を詠んだとき、母と「かはづ」が同時に詠まれている意味がわかりませんでした。どのように考えたらよいでしょうか。

生徒B 私も同じような疑問を感じました。そこで私はこの短歌で使われている言葉について、もう少し調べる必要があると思います。「しんしんと」という言葉の意味を調べてみました。ある辞書には、

【意味1】あたりが静まりかえる様子
 【意味2】寒さなどが身にしみ通るように感じられる様子

という意味が載っていました。

生徒C

私は「しんしんと」という言葉を使っている次の五首の作品を見つけました。

- ・ しんしんと雪ふりし夜に汝が指のあな冷たよと言ひて寄りしか
 齋藤茂吉
- ・ しんしんとゆめがうつつを越ゆるころ静かな叫びとして銀河あり
 中畑智江
- ・ 大いなる岩を穿ちて豊かなり水しんしんと滝壺に入る
 小松カヅ子
- ・ 暖かき小鳥を埋めるしんしんと雪ふればみな死なねばならぬ
 黒崎由起子
- ・ 火のやうなひとに逢ひたししんしんとひとつの思想差し出だしたし
 永井陽子

「しんしんと」の言葉の【意味1】や、これらの作品と比較してみると、「死に近き」の短歌は、看病をしている部屋の中や屋外が静まりかえって夜が更けていく中で、遠くの田で「かはづ」が鳴いている情景を表現していることがわかります。

生徒B
 確かにそのように捉えることもできますが、「しんしんと」の【意味2】を踏まえると、「ア」と【文章I】にも書かれていたように、母の死を覚悟した作者の痛切な思いが身にしみ入っていく様子を表現しているとも捉えられます。

生徒A
 改めて二つの文章を読み返したり、皆さんの話を聞いたりして、私はこの短歌は「イ」により、生と死を象徴的に表した歌であると考えることができました。このように、五感に関わる視点や使われている言葉などに着目して短歌を鑑賞してみると、短歌に表れている場面や、その場面から想像できる作者の気持ちを多角的に読み取ることができ、深い鑑賞ができました。皆さん、ありがとうございました。

モデル問題例1

(i) 生徒Cが紹介した歌の中で使われている「しんしんと」について、「文章Ⅱ」で取り上げていた内容に最もふさわしいものは何か。次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は **8**。

- ① しんしんと雪ふりし夜に汝が指のあな冷たよと言ひて寄りしか 斎藤茂吉
- ② しんしんとゆめがうつつを越ゆるころ静かな叫びとして銀河あり 中畑智江
- ③ 大いなる岩を穿ちて豊かなり水しんしんと滝壺に入る 小松カヅ子
- ④ 暖かき小鳥を埋めるしんしんと雪ふればみな死なねばならぬ 黒崎由起子
- ⑤ 火のやうなひとに逢ひたししんしんとひとつの思想差し出だしたし 永井陽子

(ii) 生徒Bの発言の空欄アに【文章Ⅰ】の中の一文を入れる場合、どのような表現が入るか。最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は **9**。

- ① 触覚が本当に生きている歌というのは、視覚や聴覚の歌に比べると思いのほか少ない気がする
- ② 短歌でも、何かに「触れる」という歌はたくさんあるけれど、それがすなわち触覚の生きた歌だとは限らないのだ
- ③ 神経が昂ぶっているときの、異様に研ぎ澄まされた感覚だろう
- ④ 視覚なら今は写真や映像があるし、聴覚ならさまざまの音源があるが、触覚は基本的に「記録」できない
- ⑤ 触れることが命の輪郭をなぞり直すこととしたら、それは他者の命についても同じだ

(iii) 生徒たちの会話を踏まえて、生徒Aの発言の空欄イに入るものとして最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は **10**。

- ① 添寝という空間的表現と、かはづのこえという聴覚的表現とを交差させること
- ② 死に近い母の命の感触と、天から降り注ぐように聞こえるかはづのこえを重ね合わせる
- ③ 添寝によって実感する母の命と、夜の静寂の中に響くかはづの声を対比させること
- ④ 母に添寝をしている自己の視点を、かはづの声にあふれた遠田に転換させること
- ⑤ 死にゆく母に添寝する部屋の静けさを、遠田で鳴くかはづの声によって強調させること

<正答>

問5 (i)③ (ii)⑤ (iii)③